2007JCスローガン
心動共進
～互いに心を動かし、遥かなる未来へ向かって共に進もう～

社団法人 三原青年会議所新聞
JCI
やっさもっさ
2007年3月25日 Vol.344

三原JC創立45周年
MIHARA ANNIVERSARY

三原JCビジョン
誇想創力

2月例会開催

「三・食・感」事業第１弾！

協働 三原の進むべき道とは！

賞から消そして商に！

協働委員会（作田佳史委員長）は去る２月19日（月）三原国際ホテルにおいて「三・色・感」事業第一弾～身近な食を通したまちづくり～と題し、三原市近郊の市民・企業・行政の皆様にご参加いただき公開例会を開催しました。今例会では市民・企業・行政が一体となって協働でまちづくりを推進してゆく為に、地産地消を地域活性化のツールの一つとして事業を展開されている、山口県萩市のスーパー　アトラスの店長　田村公利氏をお招きし、講演していただきました。

地産地賞とは

現在は情報網の発達やスピード社会の中で、地元や地域や日本を愛する気持ちが薄れているとも感じられます。例えば「三原市の名産品は？」と聞かれていくつ答えられるでしょうか？代表的なもので、旧三原地区ではタコ・わけぎ・みかん、本郷地区ではぶどう・鮎・天然水、大和地区では桃・はと麦、久井地区では米というように多くの「食」があるのです。地域の食を見つめ直し**賞する**という事は自分の地域に愛着を持つことの第一歩だと考えます。

地産地消とは

食の欧米化等により日本の食文化は変化していますが、医食同源というぐらい「食」は健康にとって重要なものです。また「身土不二」といって、身体と土とは一つであり、身近なところで育ったものを食し、生活するのが良いとする考え方もあります。また講師はスーパーの店長という職業柄、お客様（市民）からの地物に対する需要が多かったことを知ることができ、地物コーナーを作るだけでなく地物を使った料理レシピの配布や料理教室をする事などで取り組んできました。地物を**消する**ということが第２段階ではないでしょうか。

地産地商とは

市民・企業・行政が一体となって地産地消事業を推進しているうちに、萩はもともと米が多く生産されていることからオリジナル米を作って全国に発信しようという案が出てきました。これはまさに地域全体の協働事業ではないでしょうか。苦労もありましたが、米をまちのブランドとして萩を全国にＰＲできたと思っております。その結果、萩市は地産地消と歴史観光の融合により**商する**ようになったと確信しております。

地産地消を取り組む上での注意点は

地産地消は継続事業でなければなりません。

まず行政のコーディネイターとしての熱いスピリットが必要で、地域全体が中途半端な取り組みではなく地産地消は地域の活性化の原点だと信じ、地域レベルで全てを超越し実践するものなのです。会社単独だけではなく地域レベルで生産者、行政、店舗、消費者が取り組むものでなければ、一過性のものになってしまい、後悔と借金と残骸が残るだけです。

例会を終えて

「地域活性化は一人では出来ない、どんな小さなことからでも不退転の決意をもって活動してゆけば、やがて大きなものとなり、地域を変え、まちを変え、いずれは日本も・・というように大きくなってゆく」と講師は熱く語られました。これはひとつの成功事例であり三原市が同じことをするべきだというのではありません。しかしながら協働で行なうまちづくりの素晴らしさ、力の大きさを改めて感じさせて頂けるものでありました。これはまさに私たちの目指してゆく姿であり、これから**「三・色・感」**事業を展開してゆく上で、今例会で学んだことを活かし、今後も明るい三原の未来の為に、市民・企業・行政の三者が一体となった協働でのまちづくりを推進してゆきます。

プロフィール

田村講師

田村　公利（たむら　たかとし）氏
生年月日　1957年8月3日（49歳）
㈱丸久執行役員　アトラス萩店店長

その他、ＮＰＯ 萩市市民シアター顧問、萩地域食と緑の県民フォーラム実行委員、萩地域農林業・農山村振興協議会委員、萩地域食育推進協議会委員、萩商工会議所議員等としてご活躍中。

受講者の声

私もスーパーの店長をしており、本日の講演に非常に感動すると同時に刺激を受けました。いろいろな協働での食の取り組みを聞かせていただき、私も三原市内で仕事をしている以上、今の自分に何が出来るか考えて、三原市発展のために協働での取り組みを実践してみたいと思いました。

私は観光に携わる仕事をしています。三原市も合併し、観光交流会議にて、行政、観光協会、商工会、商工会議所、飲食組合、旅館組合等、様々な立場の方に集まって頂き三原の観光を模索していますので、協働の重要性を改めて感じると共に、非常にタイムリーで参考になる意見を頂けました。

協働委員会
作田委員長

「三・色・感」

市民・企業・行政のそれぞれが三原の特色を知り、活かしながら一体感を感じていただくという意味の造語

共育 社会総がかりで教育再生を！

今日の学校教育は、学力低下や、未履修問題、いじめや不登校、校内暴力、学級崩壊、教員の指導力不足など深刻な問題があります。子ども一人ひとりが充実した学校生活を送り、夢と希望を持ち、充実した人生を送るために必要な力を身につけて欲しいと思います。かつて家族や地域社会にあった温かい人とのつながりが希薄になる中、家庭、地域、企業、団体、官庁、メディア等あらゆる層の人々が「教育の当事者」であるという自覚を忘れ、真剣に行動を起こさなかったことが、現在の教育荒廃を招いた大きな原因の一つであると思います。しっかりとした学力と人格を磨き、学校と共に、家庭や地域全体の関係者全てが、当事者意識を持って、社会総がかりで「国の宝」である子どもを育んでゆくべきではないでしょうか。

３月例会内容

共育委員会
村上委員長

三原テレビにて放映予定!!

みたかきいたか

1981年、三原駅前の「顔」としてペアシティ東館、西館はオープンして以来、三原市民の憩いの場として活躍した。◆ペアシティ東館は、百貨店の天満屋と様々な専門店の協同ビルであったが、昨年３月に天満屋が撤退した。その後、専門店だけで営業を行っていたが、新たな駅前再開発の一歩として２月28日をもって閉館した。この後、ペアシティ東館は取り壊され、新駅前再開発ビルが建設されるらしい。◆ペアシティ東館26年の歩みは、私たち三原市民に何をもたらしてくれたのだろうか。この閉館は、三原市民にとって寂しいこととも思えるが、今の三原には不要なものであると市民が判断した結果ともいえるのではないだろうか。◆今、駅前の小さな商店街が様々な危機感をもって立ち上がろうとしている。以前より、駅前を利用している買い物客が減少している中、月に何回も会議を重ね「土曜テント市」を開催することを決定し、昨年９月試験的に開催した。この「土曜テント市」は三原市、三原観光協会、三原商工会議所が後援となり、様々な関係者の協力の末、大成功に終わった。郊外型の大店舗とは違った情緒あふれる賑わいが駅前に戻ってきた瞬間であり、今年から毎月第３土曜日に開催されるそうだ。◆最初は商店街が立ち上げ、様々な企業、行政と協働で行われた「土曜テント市」は市民の期待と様々な夢に溢れているようにも思われる。三原市民として心から応援したいと思う。

本紙『やっさもっさ』は、1月から11月まで毎月1回発行し、新聞折り込みを中心に配布しております。何卒ご愛読ください。　※資源保護のため再生紙を使用しています。